



譚バラード歌

雲晴

春彼岸号

「雲晴」第五十号

令和六年三月一日発行

貞林院瑞正寺

〒125 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
電話(〇三) 三六二七―三四一―五

FAX(〇三) 五六九九―五九一―五

① 仏凡一如(仏もわれも)

小さくとも よい友をもち よい交りをし
一人から 二人へ 三人から 五人へと
ひろく その輪を ひろげたい

憎しみを やわらげ 腹だちを おさめ
その大きな力とは こども心の 純情と
ただひたすらの 愛の心である
やわらぎの 心とは
なさけといい 慈悲という 仏の心である

父を信じ 母に頼る こども心の素直さが
仏をおがむ 心である
曲げてはならぬ ゆがめてはもならぬ

ただ ひたすらに 父と母とを 慕いつつ
その 素直な 純情を 慈心とよび
悲心と言う 仏の心である



失つては ならない かたときも
生涯を 生きぬくための 心である

ことさらに 別物の

仏の心というものがあるのではない
おおらかな 慈しみの心であり やさしさである
腹立ちながら 泣きながら 苦しみながら
悩みながら それそのままの わが心である
さまざまな 憂いや 迷いと ともどもに
同じ大事なわが心である
心からこそ わるい心の働きである煩惱を制御し
断ちきらねばならないのである

煩惱即菩提と言ひ 仏凡一如と言ひ
仏道の精進は 人の人たる日行であり 修道である
言わば 仏をおがむ心である



浄土宗 「開宗の御文」

いっしんせんねんみ だみょうごう 一行住座臥ぎやうじゅうざが

ふもんじせつくごん ねんねんふしやしや 不問時節久近 念念不捨者

ぜみょうじょうじょうしごう じゆんびぶつがんこ 是名正定之業 順彼佛願故



三月、法然上人が四十三歳の出来事です。これまでのあらゆる学問や修業を捨てて、念仏一行に帰することとしたこの御文の意味をいま一度こころに刻みましよう。

「唱歌のふるさと・童謡のくに」文章です。これは浄土宗の根本經典のコーナーですが、今回は本年が浄土宗開宗八百五十年御正當に当たるため、ここでこの「開宗の御文」をご紹介させていただきます。この文は中国唐の時代の善導大師が著した「觀經疏」の中に出てくる

「いついかなる時でも一心に南無阿彌陀仏とお念仏をお称えしましう。これこそが極樂往生を叶える正しい行いなのです。なぜならば私たちがお念仏をお称えして極樂往生することこそが、阿彌陀さまの本當の願いだからです。」

華

花ひらひて 實をむすぶ 好胤

⑥ 相撲鼻胤

高田 都耶子

白ワインの発祥地、それはジョージア(旧グルジア)。栃ノ心剛史引退相撲のときに知りました。栃ノ心、ジョージア出身。本名レヴァン・ゴルガゼ。

でしよう。それを翼を広げて守つてくれたのが師匠春日野親方。日本人の心を持って、その心で相撲を取れという師匠の思いが「栃ノ心」という四股名に込められたのです。

優勝後。栃ノ心はジョージアの太陽を日本に昇らせたと言つても過言では無い。両国の関係は大相撲抜きにしては語れないものとなりました」と。

最高位は大関。引退相撲挨拶での冒頭、「十七歳で日本に来たときは誰も知らなかった。でも今はこんなに大勢の人を知っている！」と両手を広げました。

ジョージア全権大使のティムラズ・レシャバ閣下は真っ赤な「チヨハ」という民族衣装を身に纏い、驚くほど流暢な日本語で心打つスピーチをされました。「日本におけるジョージアには二つの時代がある。栃ノ心の優勝前と

そこになったことも色んな事があった

頼まれたようです。「何もさして知らなかった、大阪場所の宿舎として知り合いのお寺を紹介したことだけやっ」と申し訳なさそうでした。よく薬

さて、私の幼少期は柏嶋の時代でした。昭和の名横綱大鵬と柏戸。父は固辞したでしょうが関西の後援会長をお

一口法話



「今の一瞬が 最期であったとしても」

かつては生まれた瞬間から誰もが一歳であった。母のお腹の中に命を授かった瞬間に人としての命が始まるから、年齢も今のような満年齢でなく数え年で数えていた。そしてみんなお正月に一斉に年をとっていた。「門松は冥土の旅の一里塚 目出たくもあり目出たくもなし」 昨年のお正月から一年を経たという事は、冥土へまた一年ほど近づいた。「歳を重ねることに一年が早く過ぎる」と言う方は多いが、あっという間に過ぎた一年と同じ早さで自分自身の臨終が近づいていることに思いを馳せる方はどのくらいおられるだろうか。 諸行無常の世に命を授かった限り必ずみな死んでいく。誰かの計報に接した時でさえ、あくまでも他人事

誘いの書へ

師寺にもお参りに来てくださり、
 本堂には柏戸の孤樽(酒樽)が積
 まれていました。ほとんどの力士
 は成田山新勝寺さんなのに、律儀
 に薬師寺に奉納くださったので、
 戸関が負けると何だかうちのこ本
 尊の力不足みたいで申し訳なく思
 ったものでした。

柏戸が引退する前、昭和四十三年の暮れと一緒に食事をしたとき父は、初場所の調子はどうかというようなことを聞いたそうです。

柏戸は自分のことは言わずに大鵬のこ
 とばかり語る。大鵬の左腕が相撲を取
 れる状態ではないというけれど大丈夫
 だろうかと、一生懸命心配している。
 父は冗談半分で、「そんなに大鵬さん
 のことを心配せんでもええやないか。」



あなたはまだ五回しか優勝してないけ
 ど、向こうさんは二十何回も優勝して
 いるのだから、もつと自分のことを心
 配してくれ」と。それでも柏戸は大鵬
 のことを気に病み、その様子を見た父
 は本場の男の友情というものはいいも

のだと感じ、真のスポーツマンシップ
 に触れた思いだったと語っていました。
 同時に横綱に昇進した二人。柏戸は
 昭和四十四年の名古屋場所限りで引退
 しました。断髪式には父も招かれ鉢を
 入れました。鉢を入れるとき、ぐつと
 込み上げてくるものがあつたそうです。
 一番最後が柏戸の師匠伊勢海親方、そ
 の前が弟子の藤ノ川、その前が武蔵
 川理事長、そしてその前が大鵬でした。
 すでに柏戸は胸の中の熱いものをこら
 えている様子でしたが、大鵬がハサミ
 を入れた瞬間、柏戸はほとばしるよう
 に涙を流しました。そして割れるよう
 な観衆の拍手。それは現役時代に柏戸
 と大鵬が土俵に上がった時にも無かつ
 た、文字通り万雷の拍手だったと聞いて
 います。

「南無阿弥陀佛」

故林 錦洞書
 貞林院瑞正寺 住職 林 清方



紺紙金泥で書かれたお名号で
 す。先代が平成十四年に傘寿を
 迎え、大本山増上寺の御忌唱導

師を拜命したことを記念に金文、
 行書と書体を変えいくつかのお
 名号を制作しました。これは利
 剣名号と言ひ字画の末端を剣の
 ように鋭くして、悪因縁を断ち
 切るように書かれたお名号です。

浄土宗の大本山の一つ、京都
 の百万遍知恩寺の利剣名号は特
 に有名です。後醍醐天皇の時代
 に都では天災飢饉や疫病などで
 多くの人々が亡くなつていまし
 たが、知恩寺で百万遍のお念仏

としてしか「死」に向き合えず、我
 が事として「自分もいつかは死ぬの
 だ」ということを意識できているだ
 ろうか。今日も明日も明後日も、そ
 のまた先もずっと続いていくと思ひ
 日々を過ごしてはいないだろうか。
 慣れとは恐ろしいもの。何事にお
 いても慣れてしまうことは疎かにな
 ってしまうことに繋がるからだ。も
 し「生きている」ことに慣れ疎かに
 なつたら。「いつか自分も死ぬ」が
 意識できれば、いかに生きようかも
 考えられる。いま生きることを大事
 に、臨終の夕べまでの時間を精一杯
 に生き切ろうと思う。

(絵本山知恩院布教師会ホームページより)

を勤めたところ、これらの災い
 が鎮められました。その効験に
 より弘法大師空海の筆による利
 剣名号と知恩寺の勅額を賜つた
 と伝えられています。以来この
 利剣名号が災いを封じるものと
 して長く信仰されています。
 本年は元旦から能登半島地震
 に始まり海外での紛争も終わりが
 見えず不安な時代が続いていま
 すが、どうかこれからでも平
 穏な世の中となる事を願ひご紹
 介させていただきます。

春の彼岸法要のご案内

本年の春の彼岸法要につきまして左記のとおり行います。

ここ数年新型コロナウイルス感染予防のため檀信徒の皆様には本堂内へのご参列をご遠慮いただいておりましたが、昨年より通常の形で法要を実施しておりますのでどうぞ可能な方はご参列ください。

塔婆をご希望の方は、お早めに電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

三月二十日(水) 正午

塔婆料 三千元

回向料(お布施) 志納

【寺からのお願い】

最近お墓参りの際に、墓前にお供えとしてビール・お酒・ジュース等を置かれる方が増えてきました。墓石が汚れる、ホームレスを招く原因になるなど防犯上の問題もありますので、一旦お供えをした後にはお持ち帰りいただきますようお願いいたします。

*梅こぼれ桜散りて椿落ち

牡丹崩れて舞うは菊なり*

毎年一月下旬から二月初旬にかけて寺の境内や庭にある梅は満開となり、椿は沢山の花を咲かせます。

古来先人は表題のように、花の終わりをこのように表現されています。ひとくくりに「散る」ではなく、花それぞれの最期によって表現を出来るところが日本語の素晴らしさだと思います。この他にも朝顔は「しほむ」や紫陽花は「しおれる」などもあるようです。

さて、では人の最期はどうでしょうか。単に「死ぬ」や「ご臨終」では何か寂しいですね。浄土宗の教えからすればやはり往生の「往く」でしょう。



「山門を入り左手の梅は満開」

「往く」ということは必ず還って来る訳ですから、これは終わりではなく新たなスタートでもあります。毎年梅や桜が花を咲かすことと同じでしょう。還相回向という言葉がありますが、これは極楽に往生した後、菩薩として修行をして、阿弥陀さまからお力を頂き、現世にいる人々にそのお力を振り向けるために還ってくることを意味します。お念仏によつてそのことを約束されているからこそ、毎年一生懸命咲いている花のように私たちもこの与えられた命を大切に生かしましょう。

巻頭文新シリーズについて

この春彼岸号より巻頭文が新シリーズとなりました。これまで「法句經に学ぶ」と題して神田寺ご住職の友松浩志上人に長きに亘りご執筆を頂き有り難うございました。

新シリーズは「譚歌(バラード)」と題して梶原重道氏著作の「古いへの讃歌」より毎回選出されたものを掲載させていただきます。梶原氏は明治四十一年生まれで浄土宗僧侶でもありますが、数々の著書があります。

譚歌とは素朴な言葉でうたった短い物語詩のことですが、日々の生活で何かに留まるものがあると思いますのでお楽しみください。